

「長崎市出津遺跡出土のゴホウラ製貝輪」を読んで

4月早々、長崎県埋蔵文化財センターのホームページに同センターの研究紀要第15号が公開された。そこに中尾篤志氏による標記論攷が掲載されていたので、僭越ながら読後の感想を披歴する。

中尾氏の論攷を読んで、まず感じたのは、徹底した実証主義に基づいて書かれているという点である。氏はこれまでも釣り針などの骨角器、農具などの木製品、石錘などの石製品をとりあげ、数々の論攷を発表してきた。いずれも推論や安易な引用などを排し、実見・実測・集成・分析・検討という考古学の基本的な論文執筆姿勢が貫かれている。そのことが他の研究者の論文でも多数引用される要因であろうと推測する。当然ながら考古学も科学であり、論文に実証性こそ不可欠であることを自戒も含めて改めて気づかされた次第である。

次に論攷の内容であるが、本来であれば論文の要旨を記載して論評すべきであるが、本稿は勝手ながら感想文という位置づけにさせていただいて割愛し、いきなり個人的な見解を披歴していくことにする。

筆者が特に共感したのは出津遺跡出土の貝輪が「九州地域の南海産貝輪と異なる装着方法、素材の取り方が存在したことを示している」という指摘である。長崎県本土部の原始古代文化は、ややもすれば他地域からの波及や持ち込みと理解され、多様性や独自性が見過ごされているのではないかと言う危惧が、かねてより筆者にはあった。その点で中尾氏の指摘は、まさに我が意を得たりと言うものであった。

最後になるが、出津遺跡の長崎大学医学部の調査に関与した筆者としては同遺跡の報告書が刊行されなかったことは慙愧の念に堪えない。なぜ報告書が未刊なのか詳細は分からないが、中尾氏の論攷を読んで、同遺跡の発掘資料の公開に向けて、微力ながら尽力しなければならないとの意を強くした。

蛇足ながら個人的には弥生時代後期の貝輪に関心がある。中尾氏の論攷でも本県の貝輪出土地一覧に数遺跡が挙げられている。特に佐世保市宮の本遺跡から出土した宮の本タイプの貝輪が北海道伊達市の有珠モシリ遺跡（以前は有珠10遺跡と呼称）から出土したことで全国的にも注目された。両遺跡の距離もさることながら、時期も210年以上離れている。今の所、伝世品と理解されているが、果たしてそうなのか興味は尽きない。

詳細は次のURLから得ることができる

https://www.city.date.hokkaido.jp/kouhou3/pdf/114_03076093.pdf

2025年4月6日
文責 古門